

社会心理学研究 第7巻第3号
1992年, 210~211
書評 1

山岸俊男(著)『社会的ジレンマのしくみ』

(1990年・サイエンス社)

注目すべき本だ。

同書は社会的ジレンマの研究成果を一般の読者に紹介することを目的としている。その目的通りに、著者(山岸俊男氏、以下同様)は同書において不要な専門用語を極力排した。じかに話すように書かれた文章は実に分かりやすい。全体の構成も見事だ。論旨は一貫して淀みなく流れる。無駄な話が読者を混乱させることはない。同書は所期の目的を十二分に達成している。

しかし同書を社会的ジレンマの穏便な紹介本と割り切るのは誤りだ。この領域の成果を律儀に紹介するつもりなら、内容、構成ともに違ったものになっていただろう。同時に退屈な読み物になっていたに相違ない。が、著者の志はより高い。著者はむしろ、社会的ジレンマ研究の筋書きを自身の関心から描いてみせた。著者がそそぎ込んだ独自性こそが同書に刺激的な彩りを与えている。その意味で同書はまず研究者に読まれるべきだ。

同書は概ね次の構成をとっている。

第1章は社会的ジレンマの内包と外延を述べる。社会的ジレンマの類型(公共財型、出し抜き型など)、および社会的ジレンマとは似て非なる状況(社会的調整など)を、例を交えて紹介する。第2章の焦点は著者の立論の中心概念、「利他的利己主義」にある。むやみな協力が相互協力を成立させるとは言えない。協力が自分自身の利益になることを認識した、利己主義に基づく協力こそが重要だ、と強調する。第3章は協力反応を生むために他者への信頼感を確保する必要がある次第を説明する。N人状況での協力達成に信頼感が果たす役割を、限界質量モデルを援用して説明している。社会心理学者には目新しいだろう。第4章は社会的ジレンマの解決のためのアメとムチの使用に伴う問題に触れる。2次的ジレンマの発生や内発的動機づけの低下、などの問題である。著者自身の研究によるジレンマ下の行動の日米比較が興味深い。制裁制度が存在せぬ場合は日本人の方が協力性が低い、など、俗な常識を打破する指摘が次々と述べられる。日本人の集団主義に対する解釈も、私が知る範囲では最も鋭い。第5章は、社会的ジレンマにおける相互協力の発生が戦略の進化から説明できるか否かを、コンピュータ・シミュレーションによって検討している。アクセルロードのシミュレーション結果によれば、「非協力者を罰しない者を罰する」という選択肢があれば相互協力が達成可能だ。著者はこの結果に、協力的な者は非協力者を罰する傾向も高い、という仮定をおけば相互協力が生じ

るという自身のシミュレーション結果を対置する。読者はコンピュータ・シミュレーションが社会的ジレンマの領域でも有効な研究方法であることを納得するはずだ。第6章は勘定(社会的効率)と感情(社会的公正)の折り合いをテーマとする。ただ乗りや利益の違いによる不公正は怒りの感情を生む。そして感情にかられた行動は勘定(社会的ジレンマの解決)を阻害しかねない。そうした感情と勘定の折り合いがいかにかに困難かが議論される。最後の第7章は社会的ジレンマの解決法に関する著者の基本的立場を再提示する。重要なのは、利他的利己主義を身につけること、因果応報の構造を知らせること、利他的利己主義者が自発的に協力する環境を作ること、である。そして自発的協力を生む環境を作るために、協力して馬鹿を見ないという安心の保証を与える(ネットワークを作る、アメとムチの使用)、あるいは非協力を芽のうちに摘む必要がある、と指摘する。

全編を通じた同書の独自性の第1は、社会的ジレンマ研究の最終課題、つまりジレンマ問題の解決を志向していることである。登場する素材の多くは問題の解決との関連で叙述される。独自性の第2は問題解決における立場が鮮明なことだ。「社会的ジレンマ問題は基本的には人々の心がまえの問題なのではなく社会制度の問題である」(p.11)という立場である。

これらの独自性の背後にある著者の観点を、私は次のように勝手に解釈した。心理学者が社会的ジレンマを研究するなら、ジレンマの利得構造下にある人間行動に注意を向けるのが当然だ。従って関心の焦点はジレンマ問題を帰結する個人の動機づけ、ないし「心がけ」に集中する。結果として提示される解決策は、その心がけを変えさせること、になるだろう。

そのような「心がけ論」では(だけでは)ダメだ、と著者は言っているのだ。社会的状況には、諸個人の行動の集積が同時に個人に対する環境となる、という連関がある。「しくみ」と言ってもよい。社会的ジレンマを生むのもそのしくみに他ならない。だから社会的状況のしくみを変えずして個人の心がけだけを変えようとしても真の問題の解決にはならない。利他主義的教育によって心がけに働きかけても正直者が馬鹿を見る結果を生むだけだ。真の問題解決のためには社会的状況のしくみ自体を変えねばならない—この認識が著者の主張の根幹である。著者が提示する解決策の数々は社会的状況のしくみの変更を目指したものである点に、読者は注意すべきだ

同書を一読し、私はその内容の本質的部分にはなんら異論を抱かなかつた。細かな異論は書評には向くまい。しかし若干の注文はある。それらの注文を交え、私の感想を以下に述べよう。

第1に、提示された社会的ジレンマの類型が未整理だ

という印象を受ける。a. 通常は資源ジレンマとして公共財供給ジレンマから区別される環境問題や資源問題が公共財型のジレンマに分類されてる。b. たぶん資源ジレンマまで含めたために、公共財型ジレンマは社会的ジレンマそのものと区別しにくい。結果として、他の類型、例えば出し抜き型が同時に公共財型であり得るか否かがあいまいになった。c. 公共財型とは別に資源の有効利用型のジレンマが提示されている。この類型は全員協力（正確には過度の協力）が集団全体に最大利益をもたらさない場合を指す。だが過度の協力が最大利益をもたらさない点は、PD以外で利得構造を定義したときに普通に見られる特性である。例えば出し抜き型に分類された値引き競争では、売り手集団にとっての協利解は高価格均衡である。しかし過度に高価格を設定し合えば売り手集団の利益はかえって低下する。公共財供給でも、通常のパレート最適解は手持ちの全額を公共財に出資することではない。d. 出し抜き型と自己防衛型の区分もあいまいだ。出し抜かれぬことは自己防衛だから。直感的には、出し抜き型として例示された値引き競争、軍備拡張競争、保護貿易政策は自己防衛型と考えてもよい。e. 協力者がふえると非協力の誘因がマイナスになる（協力の誘因の方が強くなる）場合は群集行動型とされる。とすれば逆に、非協力者がふえると協力の誘因が増すChicken型があってもよい。現に公共財供給はChickenゲームと考えられることが多い（Chicken型の状況には限界質量モデルをそのまま適用することができない）。

社会的ジレンマの類型を設定する基準には少なくとも2つがある。第1は当事者間の関係（資源の共有、公共財による共通の利益、競争など）、第2はゲーム特性（静的/動的、PD/Chicken/Maximun differenceなど）である。著者の類型で言えば、公共財型とコミュニケーション・ジレンマは第一の基準から、他の類型は第二の基準から派生しているかに見える。基準を明示し、あるいは意識的に組み合わせるタイプを設定した方が、より整理された印象を与えたい。

第2に、同書が扱う事態が限定的であった点に触れた。同書は第1章で種々の型の社会的ジレンマを提示した。しかし以後の議論の対象となったのは「PD型」とでも呼ぶべき利得構造下のジレンマ事態だけである。つまり利得構造は静的であり、また優越的な（無条件に有利な）選択肢が存在している。資源ジレンマやオークション・ゲームのような動的な事態、あるいはChicken型のような変種の事態は議論の対象にはなっていない。しかもプレイヤーは常に対称的（平等）である。

この限定のコストは大きかったと私は思う。なぜなら主に社会科学の関心の故にPD型以上に条件を特定した構造が提起され、研究されているからだ。特にジレンマ問題の解決策に目を向けるなら、興味深い論点はむしろPD型以外の構造の中に組み込まれている。資源ジレンマにおける共有資源の区画化などはその平凡な例である。

社会科学の関心に背を向けて心理学に閉じ込められれば、著者の限定は正当化できる。しかしそのような正当化は著者の志に反するはずだ。

第3に指摘すべきは、著者が提起した問題解決策が意外と月並みだった点だ。著者は「心がけ論」を雄弁に排斥した。が、怒りの感情による罰にせよ、利己主義の徹底にせよ、著者が多くの頁数を割いたのは同様に個人的な対処についてである。心がけ論の変種と言ってもよい（むしろ社会的状況のしくみに作用する心がけである点で利他主義教育などとは一線を画する）。構造的な対処であるアメとムチやネットワーク作り（人によってはコミュニケーションと言う）は既に言い古されている。新鮮なのは「非協力は芽のうちに摘め」という指摘だろう（ただし初期状態で非協力が少ないことが前提だ）。

何が欠けていたかは明らかだ。社会的ジレンマ問題は制度の問題だという、著者自身が提起した視点である。そしてジレンマ問題を解決するためにはどのように制度を設計すべきか、どのような条件をそろえるべきか、という示唆である。その種の示唆を既存の研究の中に求めることはさほど困難ではなかった、と私は思う。

解決策が月並みだった理由は単純だ。同書がPD型以上の条件を対象（社会的状況）に付加していないことである。PD型以上に状況特定せぬ限り、同書が提起した以上の解決策が導かれる可能性は薄い。

私なりにいくつかの注文をつけてみた。ただし私の注文は、たとえ理にかなっていても無理難題に属するだろう。万人の注文に応えることなど、限られた頁数の制約の下では不可能だ。しかも同書の議論が社会科学に傾斜しすぎる結果になったかも知れない。

何れにせよ確実に刺激的な好著である。引き起こすものが賛美であれ反発であれ、同書は読者に生産的な思考を喚起せずにはおかない。読んで何も感じぬ者は研究者を辞めた方がよいだろう。

予算があるなら是非買って読むべきだ。

高木英至（埼玉大学）